

## 特 集

# 「コロナ禍の学生生活に関する調査」の目的と概要

阿 部 晃 士

本稿では、2023年1月から2月にかけて山形大学人文社会科学部の学生を対象に実施した「コロナ禍の学生生活に関する調査」の目的と概要について記す。

### 1. 調査の目的

この調査の目的は、山形大学人文社会科学部の学生を対象に、コロナ禍の学生生活の実態を分析し、こうした事態で求められる教育上、及び学生生活上の支援のあり方を検討することである。周知のように、2019年（令和元年）末からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行は、人びとにとって未知のリスクとして拡がり、社会に大きな混乱をもたらした。大学教育の現場でも、学生がキャンパスに通うことさえできない事態が生じ、授業もオンラインで実施せざるを得なくなった。こうした混沌とした時期を、学生たちはどのように過ごしていたのだろうか。

調査主体は、山形大学人文社会科学部附属安全安心価値創造研究所である。2021年（令和3年）4月に発足したこの研究所は、安全安心な社会の実現に繋がる価値創造を目指す研究拠点である。

この研究所につながった最初の取り組みは、2013年度（平成25年度）の「山形市における安心・安全に関する学際的研究」プロジェクトである。山形大学小白川キャンパス周辺の小学校の保護者を対象とする質問紙調査を実施し、日常生活や災害時の安心・安全感、防災情報の入手と災害時の避難意識、山形大学や山大生との関わりについて検討した（福野 2015）。

2018年度（平成30年度）には、学内で研究分野を超えた学際的研究を推進するチーム型研究拠点（YU-COE「山形大学先進的研究拠点」(M)）に採択され、「地域社会における安心・安全に関する学際的研究拠点」を形成した。拠点化後のプロジェクトとして、引き続き小学校の保護者を対象とする調査を行い「人的ネットワーク」、「安心・安全情報リテラシー」、「住民の空間認知と行動」、「山大学生と地域住民の連携」、「精神的健康」の5つの課題について時点間比較を行った。また、同じ生活圏を共有する近隣住民と山大生で意識にどのような違いがあるのかを検討した（大杉 2021）。

その後、前述のとおり2021年4月に研究所となり複数のプロジェクトを並行して実施しているが、これまでの成果を踏まえて企画したプロジェクトが、この「コロナ禍の学生生活に関する調査」である。

## 2. 調査対象

山形大学人文社会科学部の1年生から4年生である。人文社会科学部は5つのコースから構成されており、1学年あたりの入学定員は表1のとおり合計290人である。

なお、人間文化コースとグローバル・スタディーズ・コースの学生は入学時からコースが決まっているが、社会科学系の3つのコース（総合法律コース、地域公共政策コース、経済・マネジメントコース）は2年次からコースに配属される仕組みとなっており、コースごとの定員は設けられていない。本調査では、学部内の慣例にしたがってこの3つのコースをまとめて「社会系コース」と呼ぶ。

表1. 人文社会科学部の入学定員（人，カッコ内は％）

人間文化コース	80 (27.6)
グローバル・スタディーズ・コース	45 (15.5)
社会系コース	
総合法律コース	
地域公共政策コース	165 (56.9)
経済・マネジメントコース	
合計	290 (100.0)

## 3. 調査の実施と回収状況

調査期間は、当初2023年1月18日（水）から2月3日（金）としていたが、回収状況を考慮して2月10日（金）まで延長した。

調査の実施方法は、Googleフォームを用いたWeb調査である。

- (1) 1年生と2年生については、協力が得られた授業（対面）で、授業時間内にQRコードを読み取らせ各自のスマートフォンやタブレット端末で回答してもらった。
- (2) 3年生と4年生については、各教員に演習の授業時間内で同じように実施してもらうか、実施できない場合は授業での告知やWebClass（授業支援システム）でのリンクを依頼した。
- (3) その他に、WebClassを用いて、各学年の学生にメッセージを送信して協力を呼びかけた。

有効回答者は444人となり、これは4学年分の入学定員の合計1,160人の38.3%である。

なお、コロナ禍において、山形大学では総合対策本部により活動指針が示されており、2022年12月上旬以降の教育活動にかんする活動レベルは1（「感染症対策を徹底した上で対面授業を実施。教育効果が認められる場合は、オンライン授業も可とする。」）とされていた。2023年1月11日（水）の授業開始から13日（金）までは、1月14日（土）と15日（日）に行われた大学入試共通テストのためオンライン授業とされたが、その後、ほとんどの授業が対面で実施されていた。活動レベルは1月21日（土）からレベル1.5（「感染症対策を徹底した上で対面授業とオンライン授業を併用して実施」）に引き上げられたが、その後もほとんどの授業や期末試験が対面で実

施されていた。当時の山形大学の対応について、詳しくは本特集の本多論文（本多 2024）を参照されたい。

#### 4. 回答者の属性

まず、回答者の所属コースと学年を表2に示した。コース別では、社会系コースの学生が316人と7割以上（71.2%）を占めており、表1に示した定員の比率（56.9%）よりも多い。人間文化コースは86人（19.4%）、グローバル・スタディーズ・コースは32人（7.2%）となっており、それぞれの定員の比率よりも少なかった。

学年別の人数では、1年生から3年生までは一定数の回答が得られたが、4年生はやや少ない。また、協力が得られた授業の関係から、1年生と4年生については回答者の8割近くを社会系コースの学生が占めている。

学年に着目すれば、4年生（2019年4月入学）はコロナ禍以前に入学し、1年生として従来どおりの大学生活を経験した後に、コロナ禍での大学生活への対応を迫られた学年である。一方、3年生（2020年4月入学）は入学直前の2020年3月13日に「新型コロナウイルス対策の特別措置法」が成立し、4月16日に緊急事態宣言が全国に拡大されるなど、まさにコロナ禍の混乱のなかで大学生活をスタートさせた学年といえる。2年生（2021年4月入学）と1年生（2022年4月入学）は、それぞれコロナ禍の種々の制限を受けながら高校生活を送り、大学に入学してきた学生たちである。

なお、所属コースと学年に「その他」と回答した学生は、主に他学部履修の学生で、それ以外に短期留学生を含む。コース間の比較や学年を用いた分析の際は欠損値として扱う。

回答者の性別では、社会系コースは男女ほぼ同数だが、人間文化コースとグローバル・スタディーズ・コースでは女性が多いため、全体では男性186人（41.9%）、女性253人（57.0%）、その他5人（1.1%）である。

表2. 回答者のコースと学年 （人、カッコ内は%）

所属コース	学年					全体
	1年生	2年生	3年生	4年生	その他	
人間文化	16	36	23	11	0	86 (19.4)
グローバル・スタディーズ	11	15	2	4	0	32 (7.2)
社会系	103	73	84	55	1	316 (71.2)
その他	0	5	4	0	1	10 (2.3)
合計	130	129	113	70	2	444 (100.0)

表3. 回答者のコースと性別 (人, カッコ内は%)

所属コース	性別			全体
	男性	女性	その他	
人間文化コース	25	60	1	86 (19.4)
グローバル・スタディーズ・コース	4	27	1	32 (7.2)
社会系コース	156	157	3	316 (71.2)
その他	1	9	0	10 (2.3)
合計	186	253	5	444 (100.0)

出身地（実家の場所）と現在の居住地について整理すると、表4のようになった。出身地は宮城県が172人（38.8%）を占めており、山形県の138人（31.2%）を上回っている。出身地の「その他」には、北海道（9人）、栃木県（6人）、新潟県（4人）などが含まれる。なお、宮城県出身の172人のうち96人が宮城県に居住しており、宮城県から通学している学生が多いことがわかる。通学手段（表5）でも、高速バス、JR、路線バス、地下鉄等が挙げられていた。

最後に、居住形態では、実家で家族と同居している学生が約4割（43.0%）、アパート・マンションや学生寮などで親元を離れて暮らす学生が約6割（合計57.0%）であった。

この調査では、以上のような学年による経験の違いや、通学手段、居住形態によってコロナ禍での学生生活のあり方に違いが生じていたことも想定して分析していく必要がある。

表4. 出身地（実家の場所）と現在の居住地 (人, カッコ内は%)

出身地	現在の居住地						全体
	岩手県	宮城県	秋田県	山形県	福島県	外国	
青森県	0	0	0	21	0	0	21 (4.7)
岩手県	1	0	0	21	0	0	22 (5.0)
宮城県	0	96	0	76	0	0	172 (38.8)
秋田県	0	0	0	16	0	0	16 (3.6)
山形県	0	0	1	137	0	0	138 (31.2)
福島県	0	0	0	26	2	1	29 (6.5)
その他	0	1	0	35	0	1	37 (8.4)
外国	0	0	0	8	0	0	8 (1.8)
合計	1	97	1	340	2	2	443 (100.0)

表5. 通学手段 (複数回答)

	人	%
徒歩	369	83.1
自転車	226	50.9
バイク	4	0.9
自家用車	55	12.4
大学のシャトルバス	36	8.1
路線バス	44	9.9
高速バス	87	19.6
JR	84	18.9
地下鉄	26	5.9
その他	1	0.2

注：%の基数は444。

表6. 居住形態

	人	%
実家で家族と同居	191	43.0
一人暮らし (アパートやマンション)	219	49.3
一人暮らし (学生寮)	27	6.1
友人・知人と同居している	5	1.1
その他	2	0.5
合計	444	100.0

## 引用文献

- 福野光輝, 2015, 「本研究プロジェクトの概要」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』12: 49-50.
- 本多薫, 2024, 「コロナ禍を経験した文系学生のオンライン授業における意識と課題：オンライン授業と対面授業の比較から」『山形大学人文社会科学部研究年報』21: 191-209
- 大杉尚之, 2021, 「本研究プロジェクトの概要」『山形大学人文社会科学部研究年報』18: 143-145.